

# 孔子と夢と天命と

——『論語』甚矣吾衰章解釋と儒家の夢觀——

湯淺邦弘

## 序言

かつて宋儒の間に、聖人と夢との關係をめぐる次のような疑問が生じた。孔子の夢は眞の夢であつたのか否か、周公の姿を見たことのない孔子が夢に周公を見ることは可能だつたのか、夢を見なくなつて孔子は何を悟つたのか、等々。

言うまでもなく、これは、「甚しきかな吾が衰えたるや、久しきかな吾れ復た夢に周公を見ず」(『論語』述而篇)という孔子の言葉に基づく議論である。

現在、この一章は、例えば、「わたくしの老衰も、はなはだしいことだ。ずいぶん長いこと、周公を夢に見ない」(平岡武夫『論語』集英社・全釋漢文大系、一九八〇年)の如く口語譯され、そして、文字通り、孔子の衰えを表すとともに、「孔子の周公への傾倒をすさまじくあらわしている」(同)、「それ(周公)への思慕を、戀人への思慕のようにな、夢に見る見ないでいつている」(吉川幸次郎『論語』朝日新聞社・中國古典選、一九六五年)、「孔子はたいへんなロマンチスト」(貝塚茂樹『論語』中央公論社・中公文庫、一九七三年)、「理想に燃える若い孔子がいつも夢にあこがれていた」(金谷治『論語』、岩波書店・岩波文庫、一九

孔子と夢と天命と

六三年)の如く、周公に對する孔子の思慕が如何に強烈であつたかを示す一章と理解されている。

しかしながら、右の宋儒の疑問は、この章に對する解釋が、決して一樣ではなく、この孔子の言葉が、單なる『論語』の一章の解釋を越えて、聖人とは何か、聖人と夢とは如何なる關係にあるのか、という儒家思想史そのものに關わる重大な意味を持つていたことを示唆している。

また、中國古代に於て、夢は、人間精神との關係よりも、むしろ天との關係を強く持つものと思はれてゐる。夢は天の聲として、未來の吉凶を告げ、人間の言動に深く關與して行つた。『書經』『詩經』を初めとする儒家經典、『史記』『漢書』を初めとする歴代の正史など、古代文獻に天と人とを結ぶ媒介としての夢の記述は多い。

とすれば、この孔子の言葉が、周公への思慕という、精神面のみから理解され、天との關係に全く觸れられぬまま解釋されるのは何故であらうか。こうした點も、この章の持つ重大な意味を、逆に暗示しているかのように思われる。

そこで本稿では、先ず、この『論語』述而篇、甚矣吾衰章の原義を檢討し、次に、『論語集解』から現代に至る『論語』注釋史を概観し

て、この章に對する立場を分類整理し、更に、それら歷代注釋成立の思想的要因を探りつつ、儒家思想史上に於ける聖人觀、聖人と夢との關係について考察を加え、この章の持つ思想的意味を明らかにして行くこととした。

## 一

本章では、中國古代に於ける夢觀、及び孔子と天との關係を主たる手掛かりとして、孔子自身にとって夢は如何なる意味を持って存在していたのか検討し、この章に對する新しい解釋の可能性を追究してゐることにする。

先ず、中國古代に於ける夢觀については、既に前稿<sup>5)</sup>に於て検討した如く、夢は儒家經典を初めとして、中國古代の諸文獻に於ては、多くの場合、天意の象徴と捉えられていた。例えば、殷討伐を天の命と確信した周の武王の夢(『書經』泰誓中)、宣王の繁榮の豫兆であると占われた牧人の夢(『詩經』小雅、無羊)、天帝が現れて文王・武王の壽命を暗示した武王の夢(『禮記』文王世子)など、いずれも、夢は、天と人とを結ぶ媒介という重要な意味を持って登場している。

このように、夢が天の聲を告げ、未來の吉凶に深く関わってくるのであれば、そこに、夢の意味を解明せんとする占夢が存在するのも、また當然である。『周禮』には、占夢を職掌とする「占夢の官」の存在が記され、また、歷代の正史等からも、占夢者・占夢書の存在を窺うことができる。

一方、夢を、天命との關係からではなく、人間精神や疾病との關係から説明せんとする立場もあつた。例えば、「其の寐ぬるや魂交わり、其の覺むるや形開く」(『莊子』齊物論)と、精神の混交・動搖が夢とし

て發露するという道家思想の立場であり、また、疾病は體內の氣の過不足によるとした上で、「肝氣盛んなれば、夢に怒る」(『黃帝內經靈樞』淫邪發夢篇)の如く内臟疾患と夢の内容との間に緊密な關係ありとする醫書の立場である。

ところが、これらに於ける夢は、いずれも高く評價されているとは言い難い。道家思想にとって、夢見るのは精神混濁の證しとなる譯であり、また、醫書の立場によれば、夢は病氣の表れとなるからである。従つて、その後、こうした立場を獨自に發展させ、特に、人間精神との關係から純粹に夢を解明せんとする試みは、遂になされなかつた。夢は、やはり天との關わりを強く持ち續けるのである。

また、そもそも、夢を人間精神との關係から考えることと、夢を天命の豫兆であると捉えることとは、決して矛盾してはいない。

例えば、『周禮』春官・占夢に記された「六夢」について、鄭玄は、「感動する所無く、平安にして自ら夢む」(正夢)、「喜悅して夢む」(喜夢)、「恐懼して夢む」(懼夢)の如く、それらが人間精神との關係によつて生成されると注釋する譯であるが、本文に「日月星辰を以て六夢の吉凶を占う」とある通り、それらは、そもそも占夢に供する夢なのである。ここでは、夢を外なる天の豫兆と捉えることと、その夢の生成を内なる精神との關係から考えることとは、少しも矛盾とは意識されていないのである。

こうした夢觀は、『周禮』のみに限定される譯ではなく、例えば、孔子・墨子の夢について、『呂氏春秋』は、「精にして之を熟すれば、鬼將に之に告げんとす」(博志篇)と、「精」なる志には鬼神が天の聲を告げに来ると説き、また、後漢の憑異は、皇帝の問いに對して、夢とは「天命の精神に發(現)するなり」(『後漢書』憑異列傳)と答えて

いる。ここでも、夢と天命と精神とが、少なくとも相互排除の關係にないことは明らかである。

更に、こうした夢観は、古代文獻に限らず、例えば『朱子語類』には、夢の解説の條に「精神血氣と時運と相流通を爲す」(卷三十四)と説かれ、呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』には、「王氏曰く、人の精神、天地陰陽と流通す。故に夢各々類を以て至る」(卷二十一)と言われる。また、成立時期未詳であるが、『太平御覽』に引かれる『夢書』も、「夢とは、像なり。精氣動くや、魂魄身を離れ、神來往す。陰陽感じて吉凶の驗を成すなり」と、夢を定義している。

以上の如く、中國古代に於ける夢は、廣義の天の思想の中に位置付けられ、また、人間精神との關係から捉えんとする夢観は、その否定的評價とも相俟つて、純粹に獨自な展開を遂げることはなく、天と夢と人との關係の中に收斂されて行つたと考えられるのである。

次に、こうした古代に於ける夢観を踏まえて、いよいよ孔子の夢について考察してみたい。

孔子の夢として著名なのは、この『論語』述而篇の夢を除けば、『史記』孔子世家に記される「昨暮豫れ夢に兩柱の間に坐奠せらる」という夢であらう。

この夢は、孔子の死の豫兆として描かれている。孔子自身、露骨に自己の死を豫言している譯ではないが、「兩柱の間に坐奠せらる」ることの意味を、「夏人は東階に殖し、周人は西階に於てし、殷人は兩柱の間にす」と子貢に説明していることから、この夢によつて壽命という天命を孔子が悟つた、との意味に解することは容易であらう。こゝでも夢は、天の聲として登場し、孔子はその聲の意味を悟り、素直に受け入れているのである。

### 孔子と夢と天命と

このような孔子と天との基本的關係は、『論語』の中にも端的に示されている。例えば、「天徳を豫に生せり。桓魋其れ豫を如何せん」(述而)、「豫の否なる所の者は、天之を厭てん」(雍也)、「天の未だ斯の文を葬ばざるや、匡人其れ豫を如何せん」(子罕)、「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。我を知る者は、其れ天か」(憲問)という孔子の言葉。或いは、子貢の「固より天縱の將聖にして、又た多能なり」(子罕)という孔子評。これらに共通するのは、孔子個人が天と向かい合っていること、そして、天は、孔子の意志と行動を支える信賴の源となつてゐること、である。これら孔子の言葉は、自己の存在が天によつて支えられてゐるといふ自負・自信の表明とも受け取れる。

そして、こうした天に對する意識は、その生涯に互つて見られた孔子の政治参加への強い意志と密接な關係にあると思われる。例えば、「苟しくも我を用いる者有らば、期月のみにても可なり。三年にして成す有らん」(子路) という自信。また、「如し政有らば、吾を以てせずと雖も、吾其れ之を與り聞かん」(子路) という自負。そして、謀反人・公山弗擾の招きにさえ、「如し我を用いる者有らば、吾は其れ東周を爲さんか」(陽貨)と應じようとし、「我は賈を待つ者なり」(子罕)と弟子に語る爲政への強い意志は、孔子自身と天との關係を無視しては考えられない。

しかし、孔子は天への信賴を明らかにする一方、人爲では如何ともし難い天命の力を認めてもいた。例えば、「君子に三畏有り。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る」(季氏)、「命なるかな。斯の人に於て斯の疾有り」(雍也) という言葉。こゝでの天は、不可避の力を持つた「畏れ」の對象として説かれている。孔子にとつて、天は自らを

支える信頼の源であると同時に、人爲を超越した長るべき存在でもあった。

従って、孔子にとつても、夢は天と自己との間に在って、天の聲を傳える媒介であり、「兩柱の間に坐奠せらる」という夢が、壽命という不可避の天命を豫告するものと捉えられたのも當然であると言えらる。

それでは、『論語』述而篇の夢はどうであろうか。孔子のこの言葉に對する歴代の注釋については、章を改め検討する豫定であるが、先述の如く、この夢は現在、周公に對する孔子の思慕の表れと解釋されるのが通常である。

しかしながら、右のような中國古代に於ける夢と天との關係、また、『論語』に見える天と孔子の基本的關係、そして、『史記』孔子世家に見える孔子の夢と天命との關係を想起すれば、この孔子の言葉は、單に孔子と周公の關係のみならず、孔子と周公と天命との關係について語つたものと考えられる。

また、何故に周公でなくてはならないのかについても、これまで十分な解説がなされているとはいひ難い。右の孔子と夢と天命との關係から考えれば、ここに周公が登場するのは、單に周初の聖人を孔子が思慕していたと言ふに止まらず、孔子自身が周公の如く、新たな制度の創始者たらんと意識していたことを反映しているであらう。孔子の爲政への意欲がいかに強烈であつたとしても、周の王族や公族でもなく、「豫の始めは殷人なり」（『史記』孔子世家）と自ら語る孔子が、王者・君主の地位に昇るのは、その社會制度からしても元來不可能であつた。従つて、その意欲を最大限に發揮し得るのは、身分的には王者ではないが實質的には王者であるという聖人の立場である。ここに、

周公且が他の聖王を押し退けて登場する強い必然性があつたと言えらる。

以上のような考察を踏まえ、改めてこの章を解釋すれば、この孔子の言葉は、從來の解釋とはやや異なる次のような意味を持つ言葉として、我々の前に迫ってくるであらう。

孔子は、かつてしばしば周公且を夢に見た。それは、宰相の地位にありながら周の諸制度を實質的に制定し周の礎を築いた周公且を、理想の聖人と仰ぐ孔子の精神の發露でもあつた。しかし、周公の治世をこの世に再現せんとする孔子の意志・熱情を支えていたのは、自らが周公の如き聖人として天に見守られているという、孔子個人の天への厚き信頼と自負であつた。そして、そうした信頼關係を象徴し、孔子の支えとなつていたもの、その一つが夢であり、特に周公が現われるという夢であつた。孔子は、この夢に、周公の如き歴史的役割を果たせという天の聲を聞いていたのである。

従つて、孔子が周公を夢に見なくなつたというのは、單に周公且に對する孔子の思慕の衰えを表すのみならず、周公の道の再現という孔子の理想が、遂に實現することなく天の支えを失つたことを暗示しているのである。「甚だしきかな吾が衰えたるや」という孔子の嘆きは、我が精神・肉體の衰えに對する嘆きに止まらず、現實世界に受け入れられることなく遂に天との關係を喪失しつつある我が身への深い絶望感の表明でもあつたのである。

## 二

次に本章では、『論語』注釋史の上で、この孔子の夢がどのように解釋されて來ているのかについて考察してみたい。

『論語』に對する注釋は極めて多く、ここにその全てを逐一検討する餘裕はないが、孔子の夢をどう捉えるかを視點に据え、それらは概ね次の二種に大別できると思われる。

第一は、その夢を、周公への思慕、或いは周公の道を實踐しようとする意志の表われと解するものであり、最も一般的と言える立場である。この解釋は、『論語集解』以來、最も有力であると考えられるが、孔子が夢を見なくなったのは何故かという點に注目すると、更に、次の三類に細分できる。

先ず第一は、夢を見なくなったのは、孔子の意志・氣力・思慕等の衰えを示すとする解釋であり、『集解』を初めとする通常の注解の立場である。

『集解』は、「孔（安國）曰く、孔子衰老して復た夢に周公を見ず。盛んなる時夢に周公を見、其の道を行なわんと欲するを明らかにするなり」と、その夢を孔子の意欲の表れであるとし、その夢を見なくなったのは孔子自身の「衰老」によると説く。

この解釋は、刑昺の『論語注疏』及び劉寶楠の『論語正義』に於ても、ほぼ同様であり、刑昺は、「正義に曰く、此の章、孔子其の衰老するを歎く。言うところは、我れ盛んなる時嘗て夢に周公を見、其の道を行なわんと欲す。今は則ち久しく多時、吾れ更に復た夢に周公を見ざれば、是れ吾が衰老するの甚だしきを知る」と、夢の有無は孔子の意志・壯老に關連すると説く。

また、劉寶楠『論語正義』も、『呂氏春秋』を引用しつつ、孔子・墨子は實際に文王・周公旦の夢を見ていたとし、それは意志の精專なる所以であると説く。

また同様に、伊藤仁齋『論語古義』も、周公の道を天下に行なわん

とする切なる心が夢に發露し、また自らの老衰によって夢を見なくなったと説く。そして、「夢は心の動きなり。夜の夢みる所は、乃ち晝の思ふ所なり」と、人の心と夢との關係を明確にし、孔子の夢がその美しき意欲の表出であったことを強調する。

第二に、やや異質な解釋として注目されるのが、今世紀初めに敦煌で發見された『鄭注本論語』の解釋である。

孔子、昔時周公の道を庶幾う。……聖道既に備わりて、復た夢に之を見ず。今……。

一部脱落があり、解釋もその脱落部分によって變化する可能性もあるが、殘存部分から推測すれば、鄭玄は、夢の發露を周公への思慕によると捉えた上で、今夢を見なくなったのは、孔子自身に周公の如き聖道が既に備わったからであると解釋しているようである。満たされぬ思いが夢となって發現し、その充足とともに夢も消滅するという解釋である。

第三に、夢を見なくなったのは道が世に行われなからであるとする解釋がある。例えば、清の喇沙里等『日講論語正義』は、孔子は道の行われなことを嘆いたのであり、夢に周公を見ずとは言っているが、實は一日も周公のこと、天下萬世のことを忘れたことはないと言説く。また、宋翔鳳『論語說義』は、孔子自身の意志に衰えはなく、周道の衰えが孔子と周公旦の關係を切斷したと述べる。

これらはいずれも、夢の消滅を周道の衰退に求め、孔子自身に終生衰えはなかったとする點に特色がある。

以上、孔子の夢を、周公への思慕、周公の道を實現せんとする意欲の表れと捉える解釋を掲げてみた。その内部は更に三類に細分され、先ず、『集解』や『注疏』『正義』『古義』、そして現代日本・中國に於

けるほとんど全ての解釋は、夢の發現と消滅を、孔子の意志との關係で捉えた。また、鄭玄は、夢の消滅を、孔子に聖道が備わった證しとする特異な解釋を提示し、更に、その消滅を孔子の衰えではなく周道の衰えとする解釋も見られた。しかし、いづれにしても、これらの解釋は、この夢を、孔子が睡眠中に見た實の夢と認めただ上で、その發現を、孔子の思慕・意欲に依るとする點では、共通している。

三

ところが、この夢を、こうした實際の夢とは認めない、言わば、孔子と夢との關係を引き離そうとする解釋がある。次にこれを第二種の解釋として検討してみることにする。

先ず、梁の皇侃『論語義疏』は、若き日の孔子の、周公への思慕が夢となつて發現したと解し、夢を見なくなったというのは、自己の徳の衰えを孔子自身が嘆いたものと説く。但し、世界を懸照する聖人は夢想に頼ったりはしないと述べる。即ち、『義疏』によれば、實はこの夢は、聖人孔子も衰えるということを表すための修辭であると言るのである。

また、ここに引かれる李充の説は、より明確に、孔子と夢との關係を切り離そうとする。

故に李充曰く、聖人は想う無し。何の夢みることか之れ有らん。

蓋し周徳の日々衰うるを傷み、道教の行われざるを哀み、故に慨いを夢みざるに寄せ、歎きを鳳鳥に發するなり。

李充によれば、聖人はそもそも夢見ることなどない。従つてここは、孔子が實際に夢を見た見ないということを言っているのではなく、周王朝の衰退を夢見に譬えて暗示したものであり、それは、鳳凰が飛來

しないとの表現によつて周王朝の衰退を嘆いた子罕篇の言葉「鳳鳥至らず。河、圖を出ださず。吾れ已んぬるか」と同様であると云う。この『義疏』の解釋、とりわけ李充の見解は、聖人は夢を見ないとの前提に立ち、孔子の夢を、實の夢ではないとする點に於て、先の『集解』等とは全く異なるものであると言えよう。

そして、こうした解釋は、『論語集注』など宋儒の注釋に於ても、ほぼ同様に見ることが出来る。

孔子盛んなる時、志周公の道を行わんと欲す。故に夢寐の間、或いは之を見るが如し。其の老いて行ひ能わざるに至るや、則ち復た是の心無し。故に此れに因りて自ら其の衰うるの甚だしきを歎く。〔論語集注〕

先ず、朱子は右の如く、「周公の道を行わんと欲」する孔子の強い意志は、「夢寐の間」もあたかも周公を見るかの如くであったと説く。そして、老衰によつてその心が衰退したことにより、その夢も消滅したと解する。やや曖昧で微妙な表現ではあるが、朱子は、この夢を睡眠中の夢の意味に限定せず、日夜夢見ていたという意味での夢と捉えている。

このことを、より明確に斷言するのが、同じく『集注』に見える程伊川の説である。

程子は、「孔子盛んなる時、寤寐常に周公の道を行わんとす」と述べ、この夢を、睡眠中に見る夢ではなく、日夜夢見ていたという

意味での夢、即ち理想・願望の意に解している。朱子の解釋に於てはなお微妙であった實夢と孔子との關係を、「寤寐常に」<sup>②</sup>「行わんとす」と説くことにより明確に否定しているのである。

また、程子は、孔子の衰えについても獨自の見解を示す。即ち、そ

の衰えとは、肉體の衰えを言うのであって、意欲・精神の衰退ではないとする。<sup>83</sup>つまり、聖人の心に老少の別はなく、「吾が衰えたるや」とは、もはや實際にその道を実踐することが不可能となった自己の肉體の衰えを嘆いたものであって、聖人の心そのものの衰えを嘆いたのではないと強調するのである。

更に、張南軒『論語解』は、孔子が日夜夢見ていたのは周公の姿ではなく、周公の心であったと説き、程子の解釋と基本的には類似しながらも、孔子と周公との關係をより精神的に捉えようとする。

この他、『集注』系の注釋は、一般的にはこの第二の立場、即ち、この夢を實夢ではないとする前提に立脚するものが多い。

以上の如く、甚矣吾衰章に對する歴代の解釋は、細部の相違を別とすれば、『集解』『正義』等、孔子と實夢との關係を認める立場と、むしろその關係を切り離そうとする『義疏』(李充)、『集注』(程子)等の立場とに二分でき、その他多くの『論語』注釋も、基本的にはこのいずれかに屬すと考えられる。ただ、この二種の解釋も、結局、この夢を孔子と周公、或いは孔子とその時代との關係から捉えているという點では共通していると言える。

#### 四

それではやはり、先に提示したような、孔子と周公、及び孔子と天との關係に注目する解釋は、歴代諸注の中にも全く存在せず、その可能性も認め難い見解なのであろうか。

しかしながら、實は、第一の立場とも、また第二の立場とも異なる解釋が、僅かではあるが確かに存在する。

先ず、後漢に於ける占夢批判の實態を示す資料として前稿でも検討

した王符『潜夫論』は、夢を十に分類し、その三番目の「意精の夢」の例として、孔子の夢を取り上げている。<sup>84</sup>

孔子亂世に生まれ、日々周公の徳を思い、夜即ち之を夢む。此れを意精の夢と謂うなり。(夢列篇)

王符は、周公への思慕が夢となって發現したと解し、「日々周公の徳を思う」という精細な意識に基づく夢として、それを「意精の夢」と定義する。従って一見、王符の解釋も、先の第一種の立場と同様であるかと思われる。

ところが、王符の分類は、單なる分類に止まらず、それらの夢は直ちに占夢論の中へと吸収されて行く。王符は、分類した十の夢を、各々占夢との關連からより抽象化して説明した後、それらを「凡そ此の十者、占夢の大略なり」(同)と總括する。即ち、王符にとって、夢の分類は、單なる分類のための分類ではなく、また夢そのものも、結局は全て占夢に供すべきものと意識されていたことが分かる。孔子の夢を具體例とする「意精の夢」も、その發現は孔子の精神によるもの、それは單なる精神との關係に止まらず、占夢に供し、その吉凶を問うべき夢の一つであると考えられていたのである。

續いて、王符は、天の聲としての夢が、未來を豫告し、個々の事象の吉凶を暗示しているにも拘らず、人間の側がその聲を正しく聞き取らないことにより、或いは聞き取った後の愚かな言動によって、結局は夢の神聖なる豫兆性を踏み躪っていると主張する。王符にとって、夢は單なる人と人との媒介ではなく、天と人とを結び、その未來吉凶を啓示し、以後の人間の言動に深く關與して行く道德的媒介と考えられていたのである。

もとより、これは直接的な『論語』注釋ではない。しかし、それ故

に、孔子や『論語』という既成概念、或いは『論語』注釋史という枠に囚われない素直な夢觀を提示しているとも考えられる。

そして、『論語』注釋史上に於ては特異とも言えるこうした見解が、『集注』系の解釋一色に染まっていたかの如き宋代にも、實は存在する。以下に先ず、戴溪、謝良佐の説を取り上げる。

・戴少望謂う、顔淵子路死し、聖人之に人事を觀、鳳鳥至らず河圖を出ださず、聖人之に天理を察し、復た夢に周公を見ず、聖人之に吾が身を驗す。夫れ然る後に斯の道の果たして行可からず、而して天の果たして斯の世に意無きを知るなり。(『朱子語類』卷三十四)

・謝曰く、……鳳鳥至らず河圖を出さざるに及びて、然る後經世に意無ければ、則ち其の復た夢に周公を見ざるは、亦た宜ならずや。然れども聖人の私意に非ず。蓋し天の斯の文に意無きなり。

(『論語精義』)

右の如く、戴溪は、顔淵子路の死、鳳鳥河圖の不出現、周公の夢の消滅、の三者によって、聖人孔子は、各々「人事」「天理」「吾が身」を察し、理想の實現が不可能であること、天がこの世に意無きことを悟った、とする。また、謝良佐も、鳳鳥河圖の不出現によって聖人孔子は經世に對する意欲を失い、夢を見なくなったが、それは聖人の私意に基づくものではなく、天にその意がないことによるのであると解釋している。これらの解釋は、夢の有無を天意との關係から捉え、夢の意義を鳳鳥河圖等と同列に位置付けんとしている。夢の有無を精神との關係から論じてきた他の解釋とは全く異質であると言えよう。

また、やや間接的ではあるが、同じく天と夢との關係に留意するものとして、陳祥道『論語全解』の説がある。

形接するを事と爲し、神遇うを夢と爲す。事は有爲に見われ、夢は有思に出づ。孔子の盛んなる時、嘗て大いに天下に勲勞有らんと欲して周公の爲す所を思ふ。故に夢に之を見る。其の衰うるに及びてや、時命我に與せざるを知りて、復た周公の爲す所を思はず。故に復た夢に之を見ざるなり。高宗の傳説を夢み、文王の臧丈人を夢む。其の有思に出づること、亦た此くの如し。(『論語全解』)

陳祥道は、右の如く、「周公の爲す所を思ふ」という孔子の意思が夢に發したと説く。この夢を孔子が實際に見た夢であるとし、またその夢が周公且への思いの發露であるとする點に於ては、『集解』など第一種の立場と同様である。

ところが、夢の消滅に對する解釋は、『集解』『正義』とも、或いは『義疏』『集注』とも異なる。陳祥道は、老いた孔子は時の命が自己に與せざるのを悟つて、再び周公且の事業を思慕しなくなった結果、二度と周公の夢を見なくなったと説く。即ち、夢の消滅は、直接的には、老いた孔子が周公を思わなくなったことに起因するが、なぜ孔子が思慕しなくなったのかと言えば、それは、時の命が自らに與せざることを孔子が悟つたからであると言うのである。

この「時命」の内實について、『全解』は何も語らない。しかしこの解釋も、間接的ではありながら、夢の有無と天命の有無との關係を指摘したものと見て注目される。

また、荻生徂徠『論語徵』は、「明王作らず、孔子は五十にして天命を知る。故に吾が衰えたるやと曰う。天命至らず、孔子をして衰えしむ。益々天命の復た至らざることを知る。故に甚だしきかな、久しきかなと曰う」と説く。即ち徂徠は、「五十にして天命を知る」とい



う『論語』爲政篇の言葉を、「明王作り」ざることの意と解した上で、この夢は孔子の意志によって發現し、その消滅は孔子の衰えの自覺を表すものとしながらも、その嘆きは、精神や肉體の衰退によるのではなく、「益々天命の復た至らざることを知」ったことによるのであると指摘している。

更に、劉寶楠『論語正義』も、先述の如く、基本的には第一種に分類されると考えられるものの、意志が「精」であれば、それに感應して鬼神が告げに來ると説き、人の精神と夢と鬼神の三者の關係にも言及している。

これらの諸説は、その濃淡にやや差があるとは言え、確かに天と夢との關係に留意していると言えるであらう。

以上、孔子の夢に對する従來の解釋を、三種に大別して検討してきた。この内、現在、最も有力な解釋は、『集解』『正義』『古義』等に見られるもので、周公への思慕が夢になって發現したと捉える立場である。但し、何故夢を見なくなったのかについての解釋は、孔子自身が衰えたからとする通常の説の他に、孔子自身に周公の如き聖道が備わったから、或いは周王朝が衰退したから、という異説も存在するところが明らかになった。

また第二は、『義疏』『集注』等に見られる解釋で、この夢は孔子が實際に見た夢ではなく、孔子自身の或いは周王朝の衰退を表す修辭であると見る立場である。これは、第一の立場が睡眠中の夢と孔子との關係を認めるのに對して、孔子と夢の關係を引き離そうとするものであると言える。

そしてこの他、僅かではあるが第三の解釋として、王符『潜夫論』、戴溪、謝良佐等の立場がある。これは、夢の生成を精神との關係から

捉えるか否かの相違はあるものの、直接的・間接的に、天と夢との關係を認める解釋であった。第一第二の解釋が、いずれも孔子自身、或いは周王朝との關係から夢を捉えるのに對して、これらはそれを、孔子と天との關係にも留意して捉えようとしているのである。

## 五

さて、先に提示しておいた筆者の解釋は、基本的には、この内の第三の立場に類似する譯であるが、それは、この長い『論語』注釋史の上で、ほとんど影響力を持たなかつた特殊な立場であると言える。

しかしながら、先述のような古代に於ける夢觀、或いは天と孔子との基本的關係を勘案すれば、孔子の夢を天との關わりから捉えることは決して不可能ではなく、むしろ、最も無理のない、最も素直な解釋であると言えるようにも思われる。

それでは、こうした解釋の可能性を言わば無視・隠蔽する形で、第一・第二の立場が成立し、定着して行ったのは何故であらうか。以下では、この點について、道家思想に於ける夢觀、儒家に於ける孔子素王説の成立、中國古代に於ける夢觀の展開など、思想的觀點から考察を加えてみることにしたい。

先ず、第一の立場、即ち『義疏』『集注』等の解釋について考察してみる。『義疏』は、孔子の夢を、自らの衰えや周王朝の衰退を示すための修辭とし、孔子が實際に見た夢ではないと解する。孔子と生理的夢との關係を否定せんとするこの『義疏』『集注』の態度は、如何なる思想的要因によって形成されたのであろうか。

この點について参考となるのは、伊藤仁齋や中井履軒の宋學批判である。仁齋は、この夢を實の夢としない「後儒」の解釋を、「後儒狂

周の至人に夢無しの説に感いて、夫子の夢を以て、寤寐常に周公の道  
を存し行うと爲す」(論語古義)と批判し、また、履軒も、朱子・程  
子の解釋を否定する際、「至人に夢無しとは、元是れ老莊家の言、取  
るに足る無き者なり」(論語逢原)と述べ、後儒の解釋と道家思想と  
の關係を指摘している。

そこで、以下、『莊子』を中心に、道家思想に於ける夢觀と孔子の  
夢との關係について考察してみたい。

夢に飲酒する者は、且にして哭泣し、夢に哭泣する者は、且にし  
て田獵す。其の夢みるに方りては、其の夢なるを知らず、夢の中  
に又た其の夢を占い、覺めて後に其の夢なるを知る。且つ大覺有  
りて、而る後に此れ其の大夢なることを知る。而るに愚者は自ら  
以て覺めたりと爲し、寤寐然として之を知る。君たらんか、牧た  
らんかんと。固なるかな。(齊物論)

先ず、この『莊子』齊物論篇は、「夢」「覺」の別を立てるといふ認  
識自體を否定し、それを超越した大いなる目覺め「大覺」の境地に到  
達せよと説く。即ち齊物論篇では、通常明確な區別がなされる夢と覺  
も、實は我々の認識能力の限界から来る相對的區分に過ぎないと、認  
識論の一環として夢が取り上げられ、夢と精神の關係や、夢の意味内  
容の是非を問う前に、覺に對する夢という捉え方そのものが既に否定  
されているのである。

また、大宗師篇や刻意篇では、聖人の精神と夢との關係が次の如く  
説かれている。

・古の眞人は、其の寢ぬるや夢みず、其の覺むるや憂い無し。(大  
宗師篇)

・其の生や浮かぶが若く、其の死や休うが若し。思慮せず、豫め謀

らず、光あれども耀かさず、信あれども期せず。其の寢ぬるや夢  
みず、其の覺むるや憂い無し。其の神は純粹、其の魂は罷れず、  
虚無恬快にして、乃ち天徳に合す。(刻意篇)

即ち、「道」を體得した眞人・聖人の精神は純粹で、覺醒時にも憂  
いはなく、睡眠中にも夢を見ないと言うのである。

このように、認識論の一環としてではなく、生理的な夢として論ず  
る場合にも、夢は全く否定的に捉えられている。そして、聖人に夢な  
しというこの主張は、かなり有力な説であったと見え、『列子』『淮南  
子』等の道家系文獻にも度々登場している。例えば、『列子』には、  
「神凝まる者は、想夢自ら消ゆ。……古の眞人、其の覺むるや自ら忘  
れ、其の寢ぬるや夢みずと。幾に虚語ならんや」(周穆王篇)と見え、  
また、『淮南子』にも、類似の表現が倣眞・精神・繆稱の各篇に見え  
る。

これら道家系文獻に於ける夢は、右の如く、第一に、夢覺の別は我  
々の認識能力の限界から来る相對的區分に他ならず、そもそも覺に對  
する夢という認識そのものに誤りがあると、認識論の一環として説か  
れる場合、第二に、生理的な夢の存在を一應認めた上で、聖人の精神  
は純一であるから覺醒時にも憂いはなく、睡眠中にも夢を見ない、と  
いふ聖人の精神論として説かれる場合、の二つの場合がある。ただ、  
いづれにしても、『詩經』『書經』『左傳』等に見える夢觀とは全く異  
質であり、特に、聖人は夢を見ないという主張は、聖人孔子と夢との  
關係にも、一定の影響を及ぼしたのではないかと推測される。

また、夢に對する低い評價という點では、先述の如く、醫書に於け  
る夢も見逃すことはできない。『黃帝内經靈樞』は、「氣、臟に淫すれ  
ば則ち内に餘り有りて外に足らず。氣、府に淫すれば則ち外に餘り有

りて内に足らず」(淫邪夢論)と、臟府中に於ける氣の過不足が疾病を誘發し、臟府各所に於ける亂れた氣の狀況が夢になって發現すると説く。そして以下、「心氣盛んなれば、夢に善く笑いて恐畏す」(同)の如く、疾病と夢の關係を十及び十五に分類して示す。

ここでは、夢は體內に於ける「淫邪」の證しとされており、疾病の原因追求には役立つものの、逆に健康體には夢は現れないことになり、夢見ること自體の價値は低いと言へる。

こうした醫書に於ける夢觀も、道家思想に於ける聖人無夢の説と同様、孔子と夢との關係に微妙な影響を與えたことが豫想される。

「聖人は想う無し。何の夢みることか之れ有らん」(『義疏』)、「寤寐常に周公の道を行わんとす」(『集注』)という李充・程子の言葉は、『莊子』『列子』『淮南子』等の夢觀をそのまま反映したものであると言へる。『義疏』以降の時代と道家思想の盛行とを想起すれば、何故に彼等が、聖人孔子と實夢との關係を分離せんとしたのかも、自ずから明らかになるのではなからうか。

## 六

次に、第一の立場、即ち『集解』等の解釋について検討してみる。先述の如く、この第一の立場も、更に三類に細分することができた。基本的には同じく孔子と夢との關係を認めながら、夢の消滅に關しては何故にその解釋を異にするに至ったのであろうか。

先ず、鄭玄は、夢を見なくなったのは孔子自身に既に周公の如き聖道が備わったからであるとする。これは、「衰えたり」という孔子の言葉からすれば、かなりの曲解であると思われるが、鄭玄が敢てこうした解釋を施したのは、聖人孔子像の維持に危機感を抱いたからでは

ないかと思われる。もし、周公の道を再現せんとする孔子の意志が晩年になって俄かに衰退してしまつたとするのは、孔子は果たして眞の聖人だったのだらうかとの疑念が生じて不思議でない。

同様に、夢の消滅を、孔子の老衰ではなく周の衰えに求めんとする解釋も、こうした聖人像の維持と深い關わりがあるように思われる。いかに時が亂世であるとは言え、周公の道を行なわんとする孔子の意志が、現實世界の前に脆くも屈してしまつたとしたら、一體聖人の心とは何なのか、常人のそれと少しも變わらないのではないか、との疑念・反論が生じるであらう。そこで、孔子自身に終生衰えはなかつたが、それを受け入れられるべき現實の側に問題があつたのだ、との説が成立したものと考へられる。

また、この夢を天との關わりから捉へることは、右の如く、聖人としての孔子像を揺るがす危険性があるのみならず、後に形成される素王孔子像にも重大な影響を及ぼすことになる。現實世界では受け入れられなかつた孔子も、實は無冠の帝王であり、春秋に託して密かに素王の法を述べていたとするのが、漢代今文學や緯書によって唱へられる孔子素王説である。

この説は、讖緯思想の盛行とともに、例えば、孔子は母の夢の中に現れた黑龍の精を受けてこの世に生まれたという感生傳説や、孔子は水精を受けた素王として生まれてきたという聖王傳説を生じるに至る。

その孔子が、肝心の『論語』の中に於て、周公の夢を見なくなったと告白することは、孔子と天との關係を自ら否定することになつてしまふであらう。孔子素王説にとつても、孔子の嘆きは、天と自己との關係にではなく、周公且と自己との關係に對するものでなければなら

ない必然性があつたと思われる。

このように、第一の立場にとつても、第二の立場にとつても、夢を天命との關係で捉える先の解釋は、容認し難いものとなる。そうした解釋を容認することは、單に『論語』の一章の別解を認めるに止まらない。その夢を睡眠中の實夢とする點に於て、また、その夢が天と孔子とを結ぶ媒介であるとする點に於て、各々の解釋者の據つて立つ思想的基盤そのものを搖るがす恐れがあるからである。

しかしながら、なお一つの疑問が残る。それは、この夢を、『論語』子罕篇の「鳳鳥不至。河、圖を出ださず。吾れ已んぬるかな」の如く解釋してしまわなかつたのは何故かという疑問である。

子罕篇の鳳鳥不至章に對する解釋も古來二つに大別される。第一は、鳳凰河圖の不出現を、孔子自身に天命が下らなかつたことと解釋する立場であり、第二は、孔子を活躍させるべき聖王が出現しなかつたことと説く立場である。既に指摘される通り、董仲舒は賢良對策の中で、この部分を第一の立場から引用している。しかし、董仲舒は孔子を聖人と認めていないのではなく、そこには、孔子は當然受命すべきであつたのに時代がそれを實現させなかつたという前提がある。即ち、鳳鳥不至章は、孔子の嘆きを描くことによつて、逆に、當然王者となるべきであつた素王孔子を高らかに稱える章となる譯である。

それでは、この述而篇の甚矣吾衰章に對して、このように、孔子は本來受命すべきであつたのに時代がそれを實現させず、天の聲である夢も遂に消滅したのだ、というような言わば居直つた解釋が成されなかつたのは何故であらうか。

その點については、甚矣吾衰章と鳳鳥不至章の相違點に注目する必要がある。兩章とも、夢あるいは鳳鳥河圖を天と人との媒介であると

一應解釋し得る點に於ては同様であり、夢も鳳鳥河圖も、その後の中國世界の中で豫兆性・神秘性を保ち續けた點は類似する。ただ、夢か鳳鳥河圖か、という點はやはり大きな相違點であると言えよう。

夢は、『周禮』春官に「占夢の官」の存在が記され、『漢書』藝文志「雜占」の筆頭に占夢書が記載される通り、古來、國家や君主の運命を左右する重要な占術の一つであつたとされる。しかし、王充『論衡』、王符『潜夫論』の占夢批判に象徴される如く、後漢期を一つの轉機として衰退に向かつたと考えられる。もつとも、王充・王符とも、夢の豫兆性自體を認めないという譯ではなく、その豫兆性が占夢という人間の行爲を通して損なわれることがあると、占夢の過程に批判の目を向けているのである。とは言え、これ以後、歴史の表舞台に於て、占夢者・占夢書・占夢の術の様相は確かに變化して行く。

また、宋儒が夢を心の動搖の表れとして否定的に捉える如く、夢は意味的には天との關わりを持つ外的存在でありつつ、同時に、やはり人間の精神や肉體との關わりを離れられぬ内的存在でもある。従つて、天の思想の變容によつて、或いはまた、人間の精神とは何かを問う精神論の展開に沿つて、その評價も當然上下する。この點、鳳鳥河圖が、その實在性はともかく、一應對象世界の側の存在であると意識されたのと、明瞭に一線を畫すると言えよう。

更に、夢は意識の反映であり、特に抑壓された潜在意識の表出であるという近代的夢觀が登場して以來、我々は、夢と天との密接な關係を忘れ、夢を心との關係から捉えることに何の抵抗もなくなつて行くのである。

本來、孔子の嘆きが天と自己との關係に向けられたものであつたとすれば、その嘆きが卜筮や鳳鳥河圖ではなく夢に基づいて發せられた

という點も、右のような夢の特性に照らし合わせ、後の解釋史に大きな影響を与える要因の一つになっていると考えられる。

## 結 語

以上、本稿では、『論語』述而篇・甚矣吾衰章に於ける孔子の言葉の解釋を通して、孔子と夢との關係、そして、儒家思想史に於ける聖人と夢との關係について考察を加えてきた。以下では、その考察の結果を總括し、本稿の結びとしたい。

先ず、孔子の夢を如何に捉えるかという問題であるが、第一章に提示した如く、中國古代に於ける夢觀や『論語』に於ける孔子と天との基本的關係から考えれば、本來この夢は、天と孔子を結ぶ媒介として解釋し得る可能性を持っていたと思われる。即ち、この夢は、周公への思慕の發露であると同時に、周公の如き歴史的役割を擔えという天意を傳える聲でもあり、従つて、その夢の消滅は、單に、周公への思慕の衰えや孔子自身の老いを表すのみならず、天と孔子との關係喪失をも意味していると考えられるのである。

次に、『論語』解釋史上に於ける立場であるが、この解釋は、基本的には、『集解』『正義』系の立場と『義疏』『集注』系の立場とに二分される。前者は、この夢を孔子が實際に見た夢とした上で、周公への思慕が夜の夢となつて發現したとするものであり、後者は、逆に實夢と聖人孔子との關係を切り離そうとするものであつた。そして、他の多くの注釋も、基本的には、このいずれかの立場に分類された。但し、いずれの立場に於ても、その内部には更に種々の異説が存在した。また、特異な例ではあるが、この夢を、天との關わりに留意して解釋せんとするものも、確かに存在した。孔子の夢を意精の夢と定義し

ながら、結局それも占夢に供すべき夢の一つであるとする王符『潜夫論』、また夢の消滅によつて、聖人孔子は天がこの世に意を示していないことを悟つたと解釋する戴溪・謝良佐などは、その好例である。

このことは、この章の解釋が實はそれほど單純ではなく、聖人と夢との關係をめぐつて歴代の解釋者が様々に苦惱したことを豫測させられる。しかし、こうした後儒の解釋はともあれ、この夢を天と孔子を結ぶ媒介として捉えてみようとするのが、筆者の立場である。

ただ、この解釋成立の可能性にも増して、より多くの興味をそそられるのは、こうした解釋の可能性に堅く口を閉ざしつつ、『集解』『集注』の如き解釋が成立し、定着して行つたという紛れもない事實である。

そして、これには、儒家思想の歴史そのものが、複雑に、また見事に投影されていたと考えられる。『集解』や鄭注に見られる如く、既に漢代から、孔子を、聖人・素王の高みへ上昇せんとする努力が『論語』解釋の上にも展開され、また、『義疏』や『集注』に見られる如く、道家思想の盛行を受けて、聖人無夢という新たな精神論が聖人孔子と實夢との關係を分断せんとした。そして、『古義』や『正義』が、孔子と實夢との關係復舊に努めたものの、それも遂に夢と天との關係を見出だすには至らなかつた。

かくして、孔子と夢と天命との關係は、聖人孔子・素王孔子像の維持・發展に努める儒家思想の歴史の中に、更には、夢を潜在意識の表出と捉える近代的思惟の前に、はかなく消え去つて行つたのである。

## 注

(一) こうした夢に関する宋儒の議論の詳細については、拙稿「孔子の夢と

朱子學の夢論」〔島根大學教育學部紀要〕第二十四卷第一號、一九九〇年〕参照。

(2) なお、吉川幸次郎「思夢と惛夢」(一九六六年、全集第十八卷所收)は、「先秦の文學は、ほとんどすべて、惛夢、おどろきの夢である」が、「ただ一つ大へん美しい思夢がある」として、この孔子の夢を取り上げている。

(3) 中國古代に於ける夢の特質については、拙稿「中國古代の夢と占夢」

〔島根大學教育學部紀要〕第二十二卷第二號、一九八八年〕参照。

(4) 注3の拙稿。以下便宜上「前稿」と呼ぶ。

(5) 『御覽』卷三九七。「夢者像也、精氣動也、魂魄離身、神來往也、陰陽感成吉凶驗也」。なお以下、この注に於ては、原文の引用を「」によって示し、また、諸本によって異同が見られる場合には、依據したテキストを末尾の( )内に記すこととした。

(6) 「謂子貢曰、天下無道久矣、莫能宗豫、夏人殯於東階、周人於西階、殷人兩柱間、昨暮豫夢坐奠兩柱之間、豫始殷人也、後七日卒」。またこの夢は、『禮記』檀弓上にも見える。

(7) 「孔(安國)曰、孔子衰老不復夢見周公、明盛時夢見周公、欲行其道也」

(8) 「正義曰、此章孔子歎其衰老、言我盛時嘗夢見周公、欲行其道、今則久多時矣、吾更不復夢見周公、知是吾衰老甚矣」。なお、劉寶楠『論語正義』との混同を避けるため、以下、刑昺の『正義』については『注疏』と稱す。

(9) 「呂氏春秋博志篇、聞孔子墨翟晝日誦習業、夜親見文王周公且而問焉、用志如此其精也、何事而不達、何爲而不成、故曰、精而熟之、鬼將告之、非鬼告之也、精而熟之也」

(10) 「蓋夫子壯時、切欲行周公之道於天下、故夜夢屢見之、及乎其老、無復是夢、而自知其衰之甚、蓋歎此道之不行于世也」

(11) 「夢者心之動也、夜之所夢、乃晝之所思」

(12) 鄭注の訓讀は、『唐抄本鄭氏注論語集成』(金谷治編、一九七八年、平凡社)による。なお、原文は、「孔子昔時庶幾於周公之『道』」「聖道既備、故不復夢見之、今」

(13) 「此一章書是孔子爲道不行而嘆也、……夫孔子之不忘周公、乃孔子之不忘天下萬世」

(14) 「昔者孔子耳順不隲、天縱將聖、年有壯老之異、志無盛衰之分、……孔子謂周道之衰、當吾之世而益甚、如魯之郊禘非禮、其精神已不能與周公相接、制禮作樂之意、吾將坐視其泯沒精神不交、則不復夢見也」

(15) こうした解釋をとるものとしては、この他、明・劉宗周『論語學案』明・蔡清『論語蒙引』等がある。

(16) 現代日本に於ける解釋については既に序文に於て紹介したが、現代中國でも、例えば、楊伯峻『論語譯注』、楊樹達『論語疏證』等、夢の捉え方は、この第一の立場に分類される。

(17) 「故年少之日、恒存慕發夢、及至年齒衰朽、非唯道教不行、抑亦不復夢見、所以知己德衰、而發衰久矣」

(18) 「然聖人懸照、本無俟夢想、而云夢者、同物而不衰故也」

(19) 「故李充曰、聖人無想、何夢之有、蓋傷周德之日衰、哀道教之不行、故寄慨於不夢、發歎於鳳鳥也」

(20) 「孔子盛時、志欲行周公之道、故夢寐之間、如或見之、至其老而不能行也、則無復是心、故因此而自歎其衰之甚也」

(21) こうした朱子の解釋の揺れや宋儒の見解の詳細については注1の拙稿参照。本稿では、繁雜を避けるため、取り敢えず『論語集注』を朱子等の見解として掲げるに止めておく。

(22) 「程子曰、孔子盛時、寤寐常存行周公之道」

(23) 「蓋存道者心、無老少之異、而行道者身、老則衰也」

(24) この張南軒の解釋を初め、朱子や宋儒の夢解釋の詳細については、注

1の拙稿参照。

(25) 以下、王符『潜夫論』に於ける夢觀・占夢批判の詳細については、注3の拙稿参照。

(26) 「戴少望謂、顔淵子路死、聖人觀之人事、鳳鳥不至河不出圖、聖人察之天理、不復夢見周公、聖人驗之吾身、夫然後知斯道之果不可行、而天之果無意於斯世也」。なお、この解釋は、戴溪『石鼓論語答問』の甚矣吾衰章には見えず、鳳鳥不至章の解説中に見える。

(27) 「謝曰、……及鳳鳥不至河不出圖、然後無意於經世、則其不復夢見周公、不亦宜乎、然非聖人之私意、蓋天之無意於斯文也」

(28) 「形接爲事、神遇爲夢、事見於有爲、夢出於有思、孔子之盛時、嘗欲有大勳勞於天下、而思周公之所爲、故夢見之、及其衰也、知時命不我與、而不復思周公所爲、故不復夢見之、高宗之夢傅說、文王之夢臧丈人、其出於有思、亦如此」

(29) 『四庫全書總目提要』が指摘する通り、『論語全解』は、時に道家の言を引用しながら解釋し、『論語』注釋の體としては極めて異色であると云える。しかし、『潜夫論』同様、むしろそれ故に、素直な夢觀を提示しているとも考えられる。

(30) 「明王不作、孔子五十而知天命、故曰吾衰也、天命不至、天使孔子衰、益知天命之不復至也、故曰甚矣久矣」

(31) 「後儒惑於莊周至人無夢之說、以夫子之夢、爲寤寐常存行周公之道」

(32) 「至人無夢、元是老莊家之言、無足取者」

(33) 「夢飲酒者、且而哭泣、夢哭泣者、且而田獵、方其夢也、不知其夢也、夢之中又占其夢焉、覺而後知其夢也、且有天覺、而後知此其大夢也、而愚者自以爲覺、竊竊然知之、君乎、牧乎、固哉、丘也與女皆夢也」

(34) 「古真人其寢不夢、其覺无憂」

(35) 「(聖人) 其生若浮、其死若休、不思慮、不豫謀、光矣而不耀、信矣而不期、其寢不夢、其覺無憂、其神純粹、其魂不罷、虛無恬煖、乃合天

孔子と夢と天命と

徳一

(36) 「神凝者、想夢自消、……古之真人、其覺自忘、其寢不夢、幾虛語哉」

(37) 原文は、傲眞・精神・繆稱篇の順に各々、「夫聖人用心、杖性依神、相扶而得終始、是故其寐不夢、其覺不憂」、「(真人者) 是故其寢不夢、其智不萌、其魂不抑、其魂不騰、反復終始、不知其端緒」、「是故體道者、不哀不樂、不怒不喜、其坐無慮、其寢無夢、物來而名、事來而應」。

(38) 仁齋・履軒の批判は、この第二の夢觀を前提としている。

(39) なお、夢に對する立場は異なるが、程子も、聖人の心ではなく肉體が衰退したであると主張していた。肉體と精神とを、そのように明確に区分し、肉體の側のみが衰退したと斷言し得るのか、やや疑問に思われるが、程子が敢えて肉體と精神とを峻別するのは、聖人の心そのものに衰退があつてはならないとする配慮からであろう。

(40) 例えば『論語識考』の「叔梁紇與徵在臙尼邱山、感黑龍之精、以生仲尼」。なお、類似の感生傳説は、『春秋演孔圖』等にも見える。

(41) 例えば、『拾遺記』卷三に記される傳説。「周靈王立二十一年、孔子生於魯襄公之世、夜有二蒼龍自天而下來附徵在之房、因夢而生夫子、有二神女、擎香露於空中而來以沐浴徵在、天帝下奏鈞天之樂、列以顔氏之房、空中有聲、言天感生聖子、故降以和樂笙鏞之音、異於俗世也、又有五老列於徵在之庭、則五星之精也、夫子未生時、有麟吐玉書於闕里人家、文云水精之子孫、衰周而素王、故一龍繞室、五星降庭」(明・程榮校訂・漢魏叢書本)。

(42) 王充・王符の夢觀、及び占夢衰退の状況やその要因については、注3の拙稿参照。